

大智度論の方便思想

方便という言葉が多種多様な意味に用いられて特有の思想を形成したのは、大乘仏教の時代に入ってからである。そこで方便思想が如何に発達してくるかを考察するために先に般若經典（小品、大品）にみられるそれを検討した。本年度はその連続として「大智度論の方便思想」の検討へ進めたい。周知のように『小品般若』二十九品が『大品般若』九十品に増広拡大され、それが註釈された『大智度論』は百巻の組織をもっている。まず用語の調査を進めた結果、『小品般若』（羅什訳）には七十三回、『大品般若』（羅什訳）には二百四十回の方便の用語が見出されたが、『大智度論』になると四百三十一回が数えられ、しかも多様な意義に使われてくる。『小品般若』は『小品般若』の方便思想を受け継ぎ、しかも独自なものが見られたが、『大智度論』ではどうなっているか。三者を用例の上から比較すると次のようになる。すなわち『大智度論』では化他方便の増加が著しいのである。さらに「大智度論独自の方便思想」は次のような特徴がみられるの

日 下 俊 文

	7	6	5	4	3	2	1	
合 計	論独自の方便	大品独自の方便	虚 仮 方 便	通前三つに便する方にも	化 他 方 便	施 造 方 便	権 巧 方 便	
七十三回			三回	十六回	七回	八回	三十九回	小品般若
二百四十回		十五回	五回	四十七回	五十五回	五十九回	五十九回	大品般若
四百三十一回	八十二回	三十六回	一回	六十六回	百二十九回	六十三回	五十四回	大智度論

で、これを十三に分類した。①釈尊の生涯が方便であるという。即ち釈尊が人法を受けて八十才入滅までの一生涯は、衆生に深法を信ぜしめるための方便であるという。釈尊が「方便力を以っての故に、孩童幼稚少年、成人を現作す、諸時の中に於いて、次第に嬉戯、術芸、服御、五欲を受け、人の法を具足し後漸く老病死苦を見て厭患の心を生じ、夜中の半に於いて、城を踰えて出家し」、得悟、説法、入滅する、これ

を方便というのである(10回)。^②八聖道、正精進をいう。即ち「愛等の諸の煩惱を断する方便は、是れ道諦」、「涅槃を得るの方便たる八聖道」といい、「正方便は、勵策して速に進んで息まざらしむ」等というのである(8回)。^③「正憶念なく、利なる智慧なく、衆生中に於いて、深き慈悲なきは、内には是の如き等の方便なきなり」といって、正念、智慧、慈悲心をすべて方便に帰している(1回)。^④「何か是れ方便門なる、所謂般若波羅蜜経を誦誦し、正憶念し、思惟して説の如く修行する」といって、誦誦、思惟等を方便とする(4回)。^⑤「成者は一たび聞いて能く得て、得て忘れず、是を陀羅尼を聞持する初方便と為す」といって、聞持陀羅尼の義に用いられている(4回)。^⑥「仏経には世界は無量なりと言うと雖も、此れ方便の説にして、是れ実の教にあらず」といって、実に対する方便が説かれる(7回)。^⑦卷第十七には、得禪の方便として五塵、五蓋等の除去を示している(1回)。^⑧「方便力をもっての故に、一波羅蜜を行じて、能く五波羅蜜を摂す」「巧方便の故に、一を能く多と為し、多を能く一と為し」といって、いわゆる集成方便が示される(2回)。^⑨卷第三十には法性身の仏の説法を「不可思議なる方便智力あって、悉く能く聴受す」という(1回)。^⑩一般的な「てだて、工夫」等として用いられている。「一切の人は皆方便して樂を求む」、また「煩惱を滅する方便の法、是を道と名づく」とい

う(38回)。^⑪方便道といって般若波羅蜜道と並べて用いられている「道に二種あり、一には般若波羅蜜道、二には方便道なり」(2回)。^⑫諸法の一一に九種ありといつて、体、法、力、因、縁、果、性、障礙、開通方便という(1回)。^⑬「方便あるが故に、法は畢竟空なりと雖も、亦是の如く知る」といって、仮名、因縁の処を知る義に用いられる(3回)。このように多様多義に方便の語が用いられている。

次に方便と六度、方便と般若との係わりは如何であろうか。まず方便と六度との関係について検討すると、(イ)方便が六度であるとされる場合、(ロ)方便と六度とがそれそれ別異であるとされる場合、(ハ)方便が六度を完成させる場合の三通りがみられる。(イ)方便と六度とが同義に用いられるのは、「摩訶衍は、初発心に願を作すより、乃ち後の方便の六波羅蜜に至るまでなり」(卷四六、大正二五、三九四c)等とするところである。次に(ロ)方便と六度とは異つたものとして説かれている。「漸漸に当に六波羅蜜を行じて、方便力を得」(卷二八、二六七c)、また「更に一説して六波羅蜜を行じ、更に一説して方便を行じて、無生忍を得」(卷三六、三二九a)といつて、方便と六度とはそれぞれ異つたものと示している。さらに(ハ)方便が六度を完成させる説示には、「要を以て之を言え、無方便とは、六波羅蜜を行ずと雖も、内に我心を離るること能わず……中略……仏道に至ること能わず、此と相違する、

是れ有方便なり」（卷五六、四六三b）「六波羅蜜等の諸法を用うれば、方便の和合を以つての故に能く行ず、是の時菩薩道を具足す」（卷九一、七〇二c）といつて、方便を具足して六度を行ふことが強調されている。さらに方便力によつて「一波羅蜜を行じて、即ち能く五波羅蜜具足す」（卷八二、六三五c）、また方便を具足するので「未だ諸の煩惱を断ぜず、未だ生死を離れざるに、而も能く煩惱を断じ、生死の法を離るる者に勝る」（卷八二、六三五c）といつて、方便の意義は深まるのである。この三者中（イ）が最も強調され、方便は大乗仏教菩薩道の実践上、不可欠の思想として展開されている。これが『十地経』の十波羅蜜になると、六度の上に方便波羅蜜として加上されてくるのではないかと思う。

次に方便と般若波羅蜜との関係は如何に説かれているだろうか。六度中般若波羅蜜は「般若波羅蜜の中より、五波羅蜜を生ず」（卷五六、四六五c）、「六波羅蜜は、般若波羅蜜を本と爲す」（卷四〇、三五一a）等といつて、般若波羅蜜は六度の根本として、前五波羅蜜と同等に扱わず、最勝なるものとしている。しかし般若波羅蜜は「語言の道を断じ」、憶想分別を越えたものであるから、般若波羅蜜のみでは功德を具足せずという。即ち「若し但、般若のみ行じて、五法を行ぜざれば、則ち功德を具足せず、美ならず、妙ならず」（卷五

九、四八〇c）、般若と五法、即ち五波羅蜜とは和合して功德を具足せねばならないのである。この般若波羅蜜は、次の二面によつて説示されている。一は「語言の道を断じ」憶想分別を越えた絶対真空の面であり、二は「よく善道を行ずる」妙有の面である。前者については「般若波羅蜜は、分別する所なし」（卷七七、六〇二b）、「般若波羅蜜中には、一切の諸観を滅す」（卷七六、六〇一c）等といつて、般若波羅蜜には定相がないので「無相の相」「一相無相」「無一定相」等と説示されている。般若波羅蜜の真空なる性格が、畢竟空不可得と示されているのである。後者については般若の畢竟空を空無と理解されるかも知れないが、この点、空無に墮することなく、自由躍動の妙有的性格を説いている。「是の般若波羅蜜は、畢竟空と雖も、而も断滅に随せず」（卷五六、四五七b）、「有を離れ、無を離れ、非有非無を離れ、愚痴に墮せずして、能く善道を行ずる。是を般若波羅蜜と爲す」（卷四三、三七〇a）という。「不可得空を知つて、還つて能く諸法を分別し、憐愍して衆生を度脱す。是を般若波羅蜜の力と爲す」（卷十八、一九五c）といつて、「意に随つて衆生を利益する」ことを説いている。般若波羅蜜にはこのような真空と妙有の二面が説かれているのである。

また方便の性格も般若波羅蜜と同様、観空、不取相と妙有

の二面が説かれている。まず前者については、「新行の菩薩は方便力なし、是の般若波羅蜜を聞いて、憶想分別し尋求し取らんと欲す」(巻四三、三七五b)、しかし「般若波羅蜜の中に於いて、方便力を得るが故に、亦た般若波羅蜜に著せず、一切の煩惱を滅し、一切十方の諸仏を見たてまつり、無生法忍を得、三界を出でて薩婆若に至る」(巻五三、四三八a)と云って不取相を説いている。さらに「当に一切法はあらゆる相無しと知るべし、是を菩薩の方便と名づく」(巻八五、六五四b)と云って、方便が「観一切法空」の智と同義に説かれている。他方後者については、「一切法は畢竟空にして、性は無所有なりと知って、而も能く還って善法を起し、般若に是の如く分別あるを以って、若しよく邪疑を除くも涅槃に入らず、是を方便と為す」(巻百、七四五c)と云って、善法を起し利益することが説かれている。般若波羅蜜と同様に方便は三十二相、八十随形好、無量の光明等の神通の示現を説いている。

以上の検討の結果、方便と般若とはほぼ同義であるとみてよく、巻第八十五には「方便とは、所謂般若波羅蜜なり」(六五八a)とある。つまり「方便は即ち是れ智慧なり」(巻四六、三九四c)である。しからばこの方便と般若との違いは存するのであろうか。巻第百には「般若波羅蜜の中に方便ありと雖も、方便(の中)に般若波羅蜜ありと雖も、而も多に随って名を受くると説く。般若と方便とは本体是れ一なり、用うる所の少しく異なるを以っての故に別に説くなり」(七五四c)と云って、若干の相違を説く。即ち「著する所なきを智慧相となし、能く事を成ずるを方便相となす」(巻三一、二九三c)、「般若波羅蜜は、能く諸の邪見煩惱の戲論を滅し、將に畢竟空の中に至らんとし、方便して將に畢竟空を出でんとす」(巻七一、五五六b)と云う。ここでは般若波羅蜜と方便とは同義には用いられず、方便はもっぱら「起功徳業」の義に用いられているのである。

さらにこの方便は、真空妙有の二面を完成させるものとして説示されている。即ち「方便とは、般若波羅蜜を具足するが故に、諸法の空を知り、大悲心あるが故に、衆生を憐愍し、是の二法に於いて、方便力を以って染著を生ぜず、諸法の空を知ると雖も、方便力あるが故に亦衆生を捨てず、衆生を捨てずと雖も、亦諸法の実に空なることを知る」(巻二七、二六二c)と云う。このように方便は、観空と大悲心を調和させて菩薩道を完全にし、実践させるはたらきを示している。般若波羅蜜を内に持つて自由なはたらきとしての方便は、六度を完全なものにして、大乘菩薩道の実践行に欠すことのできないものとしての地位を占めてくるのである。詳細は西山学報31号参照。

(西山短期大学講師)